

黒旗から怒りをこめて アツピール

大島英三郎

一序一九三二年五月十日黒色戦線社より発行された『革命断想』は、大杉栄と共に労働運動社を設立し、雑誌『労働運動』を発行しつつも、イデオロギー上の相違から、その当時『小作人』を発行し、のち、社会主義同盟の機関誌『社会主義』を発刊した岩佐作太郎の著作である。幸徳秋水の反議会主義Ⅱ直接行動論から始まるイデオロギーの導入は、まさしくこの岩佐や八太舟三に於て日本に於ける一定の定着と完成を見るのであります。

「大きな船が静かに波の上に浮んでいます。船の中では大勢の人々が、お互いに、喧嘩をしたり、奪い合ったり、殺し合ったり、だまし合ったり、虐げたり、虐げられたり、搾ったり、搾られたり地獄そのまま、修羅場を出現しています。船は大きく、波は静かである。人々は永久に、安全に、波の上に浮んでいると思っているのだが、それは間違っていた。波の流れは急になっている。それは千丈の瀑布(滝)になっている。今にして引きかえさねば、船は千丈の瀑布の底に落ちて、木葉みじん人々は魚腹を肥やすことになる(序より)」

右の引用文は、現代凶暴性をあくまでも堅持しつつも理性的側面がみじんも無く人類史上かつてないほどの残忍、背理・冷酷をもつ

て、全世界人民と真向うから敵対している帝国主義諸勢力によって、社会が全面的に崩壊に向っている状況を述べていると思われまふ。おそらく帝国主義が我々を地獄の道連れにしようと思んでいる事を、指摘しています。ちなみに、我々人民の歴史は、虐殺と餓死と滅亡の強制・強迫へと追いつめられながらも、殺されたくない・亡びたくないと思つて直接あるいは間接において抵抗した防御性と受動性に基く歴史であった事は、周知の事実であります。それは、マルクス・レーニン主義者が主張するような、単なる階級闘争の歴史なんかでは決して無く、一定の状況から己を己として堅持するという側面を持つ相互扶助の歴史であったのだと思います。

すなわち、底辺プロレタリアートは、長期にわたり歴史的に、直接暴力的権力および金権に支配破壊されながらも秘かに「能力に応じて働き、必要に応じて撰取する」式の社会性を採用してきたのであります。

ようとしていたといった規定を行なってきたのであります。しかし、

ここで、前述の『革命断想』の中にこの問題に関して構想面で少し興味深いアイロニーがありますので、幾分長くなりますが、引用して見ましょう。「然らばこの障害物の性質はなんであるか。それは社会組織ではなくして、人類の社会生活上の派生もしくは寄生した一種の生活共同態の力だ。人類社会を人体に例えたとそれはガンかダニの害毒力だ。封建制度およびそれ以前の制度に於ては、このガンもダニも人体を離れて存在しているのだ。人々はそれを尊敬して高所に祭り上げて大切にしていた。従つて、その害毒も人を殺すほどまでに至らなかつた。現時のブルジョワ制度となるに及び、そのガン或はダニは人体全面にはびこつて人体はあたかもガン・ダニであるかのような外見を呈するに至つた。従つてその害毒の及ぼすところも甚だしく、人体は疲労困憊の極に達し、そのガン、そのダニにさえ栄養を送り得ない有様になって来た。これは人体は勿論の事、ガンそのもの、ダニそのものに取つて一大恐慌であらねばならぬ。ガンのものは、ダニそのものは自分たちの永久性、自分たちの必要性を高調せねばならぬばかりでなく、彼等自身も自ら分解作用が何かせねばならなくなつてきた。」(頁43より)真に現象面としてこの状況の実例は豊富にあります。例えば、恐慌とか中心的資本主義間に於けるエコノミック抗争や開発途上国と米ソのような停滞帝国主義国との間の抗争をしてその縮小された形態としての党派闘争などでありまふ。方法論の相違に關しての問題はのちに少々述べて見たいと思ひますが、特に終局の目的を同じくする実質的同志間の争ひは、精神的肉体的両面で死闘し極端主義的関係として、貫徹されてしまふがゆえに、全くの不条理と言わねばなりません。多分シーシュ

ポスの明るさまで持ち合わせぬ全き暗黒でしょう。

今年の三月中旬、これまで景氣を支えてきた民間設備投資、個人消費支出が急激に落込み、都市銀行の貸出約定平均金利が、戦後最高の水準に接近して企業資金繰りが窮迫したことによる景氣停滞と石油製品的大幅引上げ等による物価上昇とが併合するスタグフレーションに突入したと言われました。すなはち暴力的恐慌回避策が経済危機へと転化してしまつたのであり、それによつて経済界が、ジリピン状態に追いつめられたのであります。ここに至り政府は、この事態を外面的に止揚せんと企つて、憲法21・23条や教基法10条等、己の立法にすら背反する教育への介入、主観的刑法に基づく刑法改悪等ありとあらゆる領域で社会防衛論Ⅱ応酬主義的世界感を打ち建てようとしています。このファシオ攻勢に対し、反体制の意識ある人々は合法主義あるいは非合法主義の上で反抗して居ります。政府は、戦前の天皇制ファシズムのような明確な政治思想性が確立不可能なため、戦略性を持った攻勢では無く単なる戦略的戦術の攻勢しか出来ないでいるのです。そのために本質的に殲滅戦を貫徹することは容易な事に思えます。しかしながら、社会革命というものは、労働者階級自身総体が社会変革の必要性を悟り、生活条件変革のための欲求を原動力として闘争の氣運が出来たという条件下でのみ起り得るものです。職業革命家なぞ不要なものです。所謂革命家たる事を拒否し、人間—普通の人以上に尊いものは、この地上には一人だつていやしいという前提に立つて始めて可能なのです。レーニンは、職業革命家・指導とその逆の確固たる分業、政權の奪取を強調しました。そして全ての労働者国家がその指針に従っているのです。が、それらは真に悲しい事に、単に現代帝国主義の模造品Ⅱ類型

を作ってしまったのであります。彼等マルクス・レーニン主義者は、船が滝の底に沈んだならば自分達も共に沈んでしまふであろうことに、弁証法の手違いに気付いておりません。自分達は安全な岸辺に居るのだと確信しているのです。革命に勝利するために、人民を援助し、進行中の革命から自ら学習し、革命運動には歴史的知性を超越するものが不可欠であると人々に訴え続ける一方で、必ず中央集権的世界プロレタリアート独裁Ⅱ統一共和制の樹立を強調して、ブルジョワジーの後釜にすわり、自分達の支配と搾取を樹立しようと考えています。彼等はただ単に階級の利害存在のみ獲得して、人間自体の利害存在には無知であります。要するに相互扶助の歴史を無視して社会主義的意識を外部注入論に依拠させようとしてきたのは周知の通りです。

そういった観点に立つて現代のアナキズム陣営を見ますと、真に残念な事にこういった妄想のような偽善のような発想に基づくサークル主義者たちがはびこっています。アナキズムを教条主義的に当てはめて、自己を前衛として規定して自己主張を絶対化してその上自己を正統化することによって他を批判する価値も無いものと規定する人々があります。合意・無限定・分散性・流動性を基調とする自由連合革命を否定してこうとする人々があります。勿論革命というものは、科学的イデオロギー唯でなく、実際に意志する人々の主意的行動すなはち可視的権力機構への直接行動に依拠してもたらされる事は、自明でありますが、一個人の自由は他人の自由に保障されてのみ存在して、相互依存するものであるために、所謂「実践」の勝利は自己の敗北を己の中に許容する由、「アナキズム」自身の敗北を意味してしまう事をアナキストは自覚していなければならぬ

と思うのです。ちなみに権力欲とは、出来るだけおおぜいの他人の意志を自分の意志の方へ条件づけたいという欲求が充足される場合、その程度に応じて何らかの満足感を覚える本能であり、且つ非合理的なものだそうであるが、現象形態としては、可変的存在と考える方が正しいだろうと思います。革命下においては、自動的に全面的に活動的となつて、社会が共同意志の表面の場にすぎなくなることを全面的に信頼してもさしつかえないと思います。その上私たちにとって革命とは一つのものが公認のルールになるのは、実はもはや生命を失ない形骸化した時である――まさしく不断なる永久革命のこととあります。「その場合には、またもや支配が確立された証拠ですから、その支配は倒壊されなければなりません。それは意識化した人々によつてのみ倒壊されるのです」「人間は新しく生じて来るあらゆる可能性つまり労働の軽減、感性的想像力の発展、貧困と戦争の廃絶などを実現する能力の所有者たるためには、不斷に自分自身を不安に曝してゆかねばなりません。」(ルディ・ドウチュケより)計画や設計図を前提とした革命などというものは絶対にありえません。

―黒い九月について―一九二三年十二月二七日午前十時四十分虎ノ門に登上した難波大助は、彼岸の日本人民を画期的闘いにより、比岸のものにしようとした上、私たちに對し、巨大な任務の実現を目指す不斷の目的意識的活動を果すことを要請し続けてまいりました。難波の独自性は、社会的正義の先駆者として、その素晴らしい英雄性・献身性をもって、当時の大日本帝国臣民に対して巨大な課題をつきつけたことにあるだろうと思われまふ。そうした行動と犠牲の上に輝く虎ノ門事件は、革命の情熱は、社会主義用語すなはち観念的な事をはるかに凌駕したものであるという基点から、口先だけの反権

力・反権威主義・絶対自由主義すなはちエセアナキズムを暴露してその呪縛の力から覚醒させようとしたものであります。ゾレルの「運動が一切で、目的は無である。」を自ら立証したものであると思ひます。日本の民衆は、今までこの事件の偉大なる意義を陰蔽してしまひその上大変低く評価してきたのでありますが、天皇主義の復権すなはち超越的価値の自己表現を美意識にゆだねてきた日本の伝統的意識構造と符号した帰死回生の路線の台頭せる今だからこそ、この非を認め、まずもって自己批判していただかねばならないのではないかと思われまふ。

難波大助は、彼が刑死するまでの約二年半にわたり友情を暖めた歌川克が指摘しておられるように、気分感傷者つまりある時はボルシェビキ・ある時はアナキスト・ある時はサンジカリスト・ある時はテロリストであつたという事実は否定できなく、実際のには、自己のイデオロギーを持たず、それを拒否し続けた人であつたと言えます。

大杉が国際無政府主義者大会に出席のため渡欧し、パリのメーデーで演説中に官憲に発見され送還されて帰国した時の事を同年七月一六日歌川宛書簡の中の詩に書いて居ります。

―偶像の末路

新調(う)の背広にヘルメット帽!

二等船客、一等汽車客!

洋行帰リジェントルマン!プーチブルジョア!ブル新聞に載つた

(御真影)に無政府主義者の(御名)がなかつたら

全く間違えるよ、ブル御子息殿の(御帰朝)と
しかしそれでよいのだ、それで。

遠慮がいるものか、飯の食えぬ惨めなプロレタリア共への遠慮などいるものか、雄々しくも勇敢にもパリー三界まで出かけてポアンカレ皇帝の太にかまれて(御帰朝)だ!!
それで、それはよいのだ
空想と御芝居から放れて――
無産労働者の大群は着々と組織と争闘へと向かつて猛進する

―(無政府主義者の親方帰朝)―
これは「美しきテロル」に己の感性和衝動を依拠させ国家を打つた彼にして当然の見解であつただろうと思われまふ。彼が所謂「黒い九月」を経たのち大杉を全面的に止揚することができたのは、組織―結合―力といった頭の中だけのお遊びではなく、国家という公的支配を持つ共同体に対し私人として突撃して自己の内的決断に寄り世界を占有した事に依ると思えます。まさしく明確な戦略論・組織論を放棄したことに依拠するのです。

思うにアナキズムとは、メルロフポンティの言及する各々の「脱自」が同一世界に共存共榮することでありましよう。武闘・戦争・イデオロギー、へと進化せしめて、軍事論・組織論等の自体的存在を認めるプラトン主義的立場を個々人から去勢してゆく事だと思ふのです。根本的―思想発生のための存在了解は、マルクス主義のそれとは、接点がありません。アナキズムの皮相的側面Ⅱ傾向性はマルクス主義のそれとは全く次元の異なるものと思ひます。そのためにマルクス主義にリベルテールの傾向を追加することは、単にドンキホーテのような徒勞に帰結してしまうと思うのです。それは時間性に依拠した権藤成卿の「社稷」の觀念が、その時間性ゆゑ逆戻り

の運命をたどるのと五十歩百歩であると思われれます。
私達は純粹形象としての眞の自由——一八八三年一月リオン裁判法
廷で発表された無政府主義宣言の中の全的自由・本當に素朴な自由
を獲得するために、現実否定の内実をもつ人間關係の變化を実現
するために、不斷なる永久革命の行使しか存在しえぬと思ひます。
しかしながらその方法論というものは、早急にその上自分勝手に結
着をつけるべきものではないと考えます。明確な情況分析を論証し
ようなどと稱する革命綱領作成行為なるもの等は、実に思ひあがり
もよいところす。直截に言えば、アナキズムは必然という拘束の
拒否から試行されていくものだと思ひ確信を持って言い切ることが
出るのです。

無政府主義研究

第3号

片岡啓治 ■ 国家制と倫理
工藤正広 ■ エセーニン論
左近 毅 ■ バクーニン論
衛 紀生 ■ 無告なる思想

A5判/500円/11月発売
直接購読 ■ 年間2000円
■ 半年1000円

玄曜社 振替 東京 147755
東京都豊島区高田3-
38-23 高田ハイツ206
電話 (03) 984-4823

大杉 栄

—— 現代的評価

秋山 清

大杉栄をめぐっては、まだ現在もかなりに伝説的な誤解がとりま
いている。昭和前半に日本の支配権力を左右した軍部に憎まれ殺さ
れたこと、大杉が畢生の敵としたボルシェヴィキがある時期、戦前
と戦後の二度に亘ってわが国の社会運動と言論の世界に君臨するか
に見えたこと等々の成行が、ほとんど常に彼にとっては不利な、と
いふべき姿で推移したという事実のなかに、その不運な誤伝が生ま
れたようである。

現在、きわめて除々にではあるが大杉への理解は、回復されつつ
深まってゆくかに見える。それはその死から50年、生前彼が主張し
たロシア革命への批判の意義がようやく回顧されはじめたことと、
権威と権力を何よりも嫌悪したその自由の精神が戦後二十数年の今
は、ようやく理解されはじめていることのかさなりからである。

しかし次に見るような大杉への評価のまだあまりな無理解の横行
を思えば彼の反逆の対象がますます強力に存在していること、した
がつて彼の思想と行動が現在の有効性を持ちつつつづけているものであ

ることを、改めて考えさせられる。

「大正十一年に大阪で催された全国労働組合協議会はいわゆる
『アナとボルとの対立』の行くところまで行った大激突として史
上有名だが、この時アナ系の総師として総同盟にぶつかった大杉
の思想はクロボトキンの『相互扶助論』であり、その翌年彼は殺
されたので、これが彼の思想の頂点と見ることができよう」『日本
のアウトサイダー』(河上徹太郎)

「幼年学校時代を中心とする粗暴や不良性は後年テロリストの素
質を約束するものである」(同上)

「——堺枯川の全集を見ると、葉山事件の批判として、性の自由
もいいが残された者の不幸も考えて見るべきだ、という意味の大
人びた言葉が見える。そしてこれらの性の解放を唱えた大杉の論
文が、岩野泡鳴の半獣主義によく似ているのは、時代思想のなす
わざであり、彼等の教養の源が狭く限られた同一個所から出てい
ることを示すものである」(同上)

日露戦争にたいする反戦活動から活潑化した日本の社会主義運動は、明治四十年に日本社会党の結成となり、その直接行動派幸徳秋水を中心とする大逆事件によって十二人が死刑になるという大弾圧に遭ったが、その後の窒息状況から立ち上がった大正期の社会運動を導いた第一人者は大杉栄であった。そのことの歴史的な理解力をまるで持ち得ない前記の筆者ごときが、一流の知識人としてまかり通っているのが日本の一民衆として私は、かかる思想と歴史へのかなしい理解は、大杉栄にとっての不幸である以上に、われわれ民衆の不運だと思わないわけにはいかない。大杉がテロリストに扱われたり、相互扶助論がそのアナキズムの頂点であったり、また性についての主張が「半獣主義」と同一視されたり、いやはや驚きあきればかりである。

「彼は時のアナキストがそうであったように、ロマンティストであった。然し彼のロマンティズムには明治の進歩派によくある粗野とハイカラの奇妙な混濁があった。それは時の習俗に反抗するものにはなり得ても精神の自律性を示すものではあり得ないのである」(同上)

この大杉栄についての感想が、まったく大杉栄の主張や実践というらはらの結論であることの理由を私は納得することができない。精神の自律を明治大正のわが国で、大杉ほど大胆卒直に表明し、実行した思想学者が他にあったとは思われないのに、それと見るにうらはらなかかる言説が、所謂一流と目されている知識人によって述べられているのである。

おそらく、自由とか、自律とかいうものが、わが国では如何に歪

曲されて現実の体制に組み込まれてしまっているかを示すこの上ない、これは例証のように思われる。反抗することなしに自由があり得ると考える、戦後の民主主義を鵜呑みにして、そこに安住する精神から見れば、監獄にとらえられ、生活に不自由し、論争に明け暮れ、警察力に追いまわされた生活は「時の習俗に反抗するものにはなり得ても、精神の自律性を示す」ものとは見得なかったかもしれない。しかし大杉栄が生涯をかけたアナキズムとは、他ならぬその自主・自律の精神の主張そのものであったのである。つまり、かかる徒輩からは、まったくうらはらに大杉栄は理解即ち曲解されているということになる。

だがかかる曲解に単純に腹を立ててしまつてはならないのだ。かかる曲解が正しい判別をよそおって、まかり通っているような現在の社会状況のなかで、もつとも有効に、澆濁とよみがえり、大手を振って横行せんとするのが大杉の思想である。卑劣化し歪曲化せんとする努力が在ることは、とりもなおさず大杉栄が、思想家として現在に生きていることを語りつけているものである。

そして、今日における大杉栄の存在とは如何なることであろうか。しかしそれは、その死のほとんど五十年をへだてて彼の生前の意味とすこしもちがっていない。わかりよくいえば、体制への不同調、それ以外のものではない。ただ彼は思想の人であるばかりか、実行によって思想を生き、そのことによって自分の生をたしかめ得た稀なバイタリティーの所有者であった。

アナキスト大杉栄、彼は関東大震災時の治安維持の元締、戒厳令下の憲兵隊の手で虐殺され、彼の革命思想は、ロシア革命の胴元ボルシェヴィキによって一たび地面に叩きおとされた。彼は階級的革命思想ではなくブルジョア急進主義である。エゴイズムである。個人的享楽主義である。性のアナキーである。貴族趣味、贅沢主義。これらはある時期の日本共産党あたりが、アナキズムと大杉栄に対して放った罵評でもあったが、注意しなければならぬことは、これらの言葉の多くが、現代の安定的な日本の社会道徳と同じ立場、同じ観念からの批判と同質であるということである。

そこに大杉の生涯の敵と対立者の姿を見出さねばならないと思う。大杉が革命家として描いた夢は、それが革命の彼方で段階的に改良され、積重ねられて、確固と無産階級中心の社会を型どおりにつくりあげてゆく、という方式のものではなかった。革命はいつもわれわれ民衆の理想・希望・要求、あるいは夢として、われわれの人間の内側にうずまいて生きている欲求なのである。

革命のために、現在の生き方や要求は犠牲となるべきであるという左翼の禁欲主義な道徳観こそ、大杉が目標としてたかたかたのもの一つである。革命活動が生きていることの喜びでもなければならぬということだが、その建前として強力に彼の運動の底をつらぬいていた。だから、ボルシェヴィキや社会民主主義の立場から、彼を道徳的に非難し、家庭の破壊者とし、アンチモラルとして憎悪をこめて叩き落そうとつとめても、それは大杉の思想をゆるがすものとはなり得なかった。

社会革命についての大杉の見解を端的に言えば、国家と国家権力

の覆滅ということに究極する。そのためには、現在ある国家の中で、無産階級がその国家の支配権力を奪取して自分らが支配者となろうとすることに根底から反対したのである。またロシア革命におけるように、民衆の各派集団の協力と闘争によって支配権力を転覆した後に、共産党という一政党のみが政治の権力を把握して支配者となり、その共産党と主張・見解を異にするものごとくを「反革命」として処断するに至ったことを絶対に許さず、としたのである。アナキスト大杉の革命思想は、革命後にふたたび支配者——政府と被支配者——民衆の対立を許すような「革命」を絶対に不可とするものであった。

「革命」という中国から来たこの言葉の意味がすでにそうであったように、一般には主権者の交替をもって革命と考えることの方が理解されやすく見えるらしいが、そのことを幾たびくりかえしたとて、いつの時も支配者となったものは、その主権を離すまいとして、民衆への圧迫をくりかえす。ある特定の階級の代表が主権者となつたとすれば、それがいわゆる無産階級であるとしても、現代の諸国家と質的、組織的にどこが異つたといひ得るのか。現在の社会主義国家の民衆にほとんど自由がなく見える現実を、大杉栄は生前はるかに見抜いていたのである。

だが彼はそのような先見ばかりではなく、同時に、自己個人の生活を、大正期という今からはるか以前の、天皇神聖の時代に、それをとりまいて形成された絶対的な国家権力と対立しつつ自我を生き貫いたのであった。国家権力を破壊するための活動と、今日を吾がために生きることが、二つのものとしてではなく、一つのものであった、その故に、戦後二十数年の現時点になおそれが生きつつける

思想こそ彼のものであったことを、たとえば前記「日本のアウトサイダー」の著者も、彼と同時代の社会主義者たちも、まったくいつていいほど理解できなかった。それを理解できなかったかなしみを自覚せず「大杉栄は粗野とハイカラの混淆のなかに、実行力と人柄の魅力」だけの存在にすぎなかったなどという伝える。

考えてみるがいい。大正の思想家で、一九七〇年にその思想と行動が今日の視点において、省みて語るに値する者が幾人あるか。それは今日における思想的現実性を、大正期の彼の思想が及んでいたことではないか。彼のアナキズムは今日からの未来に向って、なお革命性を主張しているではないか。

神近市子が語った言葉に「あの人は結局運動から脱落したでしよう？」ということが伝えられている。「日本のアウトサイダー」『エロス十虐殺』を見ながら私はその言葉を、ある気落ちするような寂寥の思いとともに思い出したのである。

大杉栄が社会運動から脱落するとはどういうことであろうか。

大杉死後の日本は、大正の末に治安維持法を改正して昭和初期の大弾圧時代を現出したが、その頃にアナキズムは退潮をひどくし、マルクス主義の全盛といつてもよかつた。やがて太平洋戦争による社会主義一般の逃亡となつたが、敗戦後の民主主義時代に社会党、日共の回復は注目をあつめた。だがかつて大杉が指導者と目されたアナキズムは容易に表面に立ち上がらなかつた。つまり神近がいつたのは、政党と政治を否定するアナキズムが、共産党や社会党がはなばなく選挙場裡に議席を争っているとき、どこにも姿なく見えたとその状況のうわつた風景を、革命運動であるかのように誤認したところから、その活動のなかにアナキスト大杉が在り得なかつた

であろうことを、運動からの脱落といったものらしい。労働運動も亦独占的国家体制の安全弁としての機能している現状のなかに、かつて大杉がリードした革命的アナルコ・サンジカリズムの活動がほとんど見えぬということなどを併せて、いつそう得々とそのような発言を敢えてし得たものである。きわめて表面的な現象として戦後アナキズムの黒旗はさきやかにしか見出せなかつたが、一方、今日ほど左翼政党の非革命性が明らかにされたこともなく、現在かつての、ロシア革命をめぐるアナ・ボル論争のいわゆるボルシェヴィキ——マルクス主義は、既成政党としての票の掻き集め以前、何の革命のための運動も展開はしていない。かかる運動からは、生きている大杉はかならず「脱落」をこそ喜んだであろう。これは革命・社会革命というものについてのあまりはなばなしい観念の相違である。

大正の革命運動家たちにおけるもう一つの大きな問題は、家庭、愛、性における閉鎖的現象である。革命運動の闘士が性における封建主義者であつたことである。社会革命とは労使の対立に於ける関係の、支配体制の逆転、ということのみと考える闘士たちの中にあって、生活、家庭、結婚、性の問題までを、一つの人間的問題としてとらえた大杉栄が、その社会主義たちからさえ異端とされたことを、われわれは今日の課題として再思せねばならないのだ。革命家が道徳的であろうとすることはわるくはない。だが道徳はしばしば権力者のためにしつらえられた民衆の牢獄であること忘れるべきではあるまい。

「法律は人を呼んで国民という。道徳は人を指して臣下という。

法律が軽罪人を罰するのは、わずかに数ヶ月かあるいは数年にすぎない。けれども道徳はそのうえさらにその人の生涯を呪う。法律はぜひぶん女を侮蔑してもいるが、それでもともかく子供扱いはしてくれる。道徳は女を奴隷扱いにする。

法律は、少なくとも直接には、女の知識の発達をさまたげはしない。ところが道徳は女を無智でいるように、しからざればそう装うように無理じいする。

法律は父なし児を認める。道徳は父なし児およびその母を排斥し、罵詈雑言、讒訴する。

法律はおりおり圧制をやる。けれども道徳はのべつ幕なしだ」

〔法律と道徳〕・大杉栄

人々とはかく法律をきらい、時にはおそれる。それに縛られることが窮屈だからである。しかし法律は道徳よりもはるかに人間にとって圧制なものである、ということこそ大杉は指摘して見せた。社会的な革命運動はいつも、この法律的な面に集中し道徳の面をおざりにしてきた。道徳は民衆のものだ、自然のものだと思ひ込んでゐるのである。だが、たとえば、大正期の道徳はあまりに女を軽んじ、侮蔑していた。男女平等を理念としては思っているとしても、知識人や革命家といえども、現実には「道徳」と同じように女を一人前に扱わなかつた。男が社会の指導者で、中心であることを当然としていた。

これは亦、革命を政治革命に限定するもので、もしかかゝる姿で革命が成つたとすれば、その権力者は、社会革命にまでず革命が及ぶことを延引し、あり来たりの道徳をそのまま革命後の社会に存続させかねない。君臣、親子、長幼、男女、支配者と民衆、師弟等々、

政治変革の後といえどもこれの道徳即社会秩序は変革不要のごとく思われているが、これこそとも非革命的なのである。革命によつて法律はつくりかえても道徳は容易に変革し得ないという思いは、多くの社会主義者にも浸透している迷蒙である。

性の自由とその解放が主張されている現在といえども、日本の社会主義政党の諸君が、男女のすべてにおける平等と性の自由とに必ずしも賛成していない事実は、明治大正の社会主義者間に在つて大杉栄が、如何に革命を彼らの理解し得ない百分の自由性においてとらえていたかを証明する。

伊藤野枝、神近市子との恋愛問題が神近の刃傷による葉山事件を惹起したとき、十数年の大杉の同志たちは、このスキャンダルを受けとめることが出来ず、村木源次郎以外すべて彼と袂を分かつた。その時大杉は日本の社会主義者たちの敵に廻つたのである。否、彼らは道徳的社会秩序の遵法者として、日本の支配階級と同じ立場に立つて大杉と伊藤野枝を道徳的敵視したのであつた。道徳的世論に組することによつて旧社会の秩序に拠つたのである。そして大正期における大杉栄のアナルコ・サンジカリズムの運動は葉山事件以後の彼の同志たちとの協力によつて進展したのである。

映画「エロス十虐殺」を見た神近市子が、そこに現われた革命意識にたいして、プリミティブな、と評したとすれば、すくなくともこの映画の旧道徳破壊の意図を革命的なるものとして捉え得なかつたことこそ、プリミティブそのものであつたと私は思う。

マルクスは「共産党宣言」の末尾において「得るところは全世界、失うものは鉄鎖のみ」と世界プロレタリア階級に呼びかけたが、現在いわゆるプロレタリアの階級経済闘争をこえて、革命はひろく深

深く浸透し、それは人間性回復を現実生活の場に重ねるものとなつてこそ、はじめて革命たり得る段階に進んでいる。

このような革命観を、誰よりも早くわがものとしたことに、大杉栄の苦難な闘いの歴史があつたのである。

大杉が性と恋愛との大胆な実行者として、もつとも社会革命を深く思考するものであつたことか、逆に誤伝されて、彼の死とともに早くも半世紀がすぎようとしているが、道徳的秩序の破壊が、経済と政治の革命と並んで、あるいはそれ以上に、国家的支配体制の破壊に至るものであることを、わきまえ惧れていたのは、彼の古い同志や社会主義者たちではなく、その体制側の権力であつた。だから彼はその手によって虐殺された。

いいかえれば、そのようにして明治大正の日本の誰よりも大杉栄を、敵は革命家として評価していたのである。

(アートシアター七五号より転載)

知恵の杜〈全集・詩集・歌集・句集等限定本〉取扱
試行・ピエロタ・他直販雑誌

下北沢不吉ノ

人を磨く

伝統で鍛えた切れ味の良い
二刀流がお待ちしております
あなたを……。

白 樺 書 院

小田急下北沢一番街

TEL 東京 460-8566

AM10:00~PM9:00

<水曜日定休>